

贛川宿・深澤家住宅の調査

はじめに 平成15年度、建造物研究室では長野県檜川村より加納屋深澤家住宅調査を受託し、同住宅の有する文化財価値について調査をおこなった。調査成果は本年度中に報告書として刊行する予定であり、ここではその概略を報告したい。

深澤家と贛川宿 深澤家住宅が所在する贛川宿は、木曾十一宿の北端に位置し、その立地から、宿場としてよりもむしろ物資流通の拠点として繁栄した。深澤家は屋号を「加納屋」と称し、遠方への行商で財を築いた典型的な贛川の商家である。

建物と建築年代 深澤家住宅の敷地は西と北を街路とする角地にあり、主屋は中山道に西面して建つ。主屋の背面には附属屋を出して便所を設け、中庭をへだてて二棟の土蔵が南北にならんで建つ。このうち北の土蔵は文庫蔵、南の土蔵は新蔵と呼ばれる。各建物の建築年代は、棟札や家史、日記などの史料から明らかにできた。これらの記述は、建物に残る痕跡や改修の状況と完全に一致しており、その信憑性はきわめて高い。贛川宿内の建物の大半は嘉永4年(1851)に贛川宿を焼きつくした大火後の再建で、深澤家住宅の主屋も例外ではなく、嘉永7年(1854)に再建されたものである。ただし、文庫蔵は大火をまぬがれた宿内でも希少な建物で、建築年代は文政4年(1821)にまでさかのぼる。新蔵は文久2年(1862)の建築で、これと同時に文庫蔵の背面に味噌蔵を増築している。

主屋の建築的特徴と価値 主屋には以下に示すような建築的特徴があり、木曾地方の町家の典型的な姿を示すといえる。

- 1 二階正面を出梁でせり出す出梁造とする。
- 2 間口全体を通し柱と胴差で固め、内部の柱位置の自由度を確保した軸組を持つ。
- 3 間口方向にかためる軸組に対応して、奥行方向への追加を容易にした架構をする。
- 4 間口方向を上下、奥行方向を表裏とする明確な空間秩序をもって室を配置し、さらに吹き抜けとなるカッテを中心に全体をまとめる室の構成とする。

この中でも特に注目されるのは、軸組・架構の技法で、正面に面する室の軸組・架構を他の部分と切り離し、構造面から整然とした正面の割り付けを実現する。従来の伝統的技法を消化し、かつ見栄えを意識して整えたこのような建築技法は、近隣の町家の中でも特に洗練されたもので、近世における木曾地方の町家の一到達点を示すものとして高く評価できよう。

今後の課題 近年、民家や近代建築など身近な歴史的建造物への関心の高まりにあわせて、その保存活用が各地で盛んに議論されている。深澤家住宅は長らく空家に近い状態であり、まずは本調査の周知をはかることを目的に、地域住民を対象にした中間報告会をおこなった。この中で聞かれた意見はおおむね良好で、贛川における深澤家住宅への愛着の高さをうかがうことができた。具体的な活用計画の策定は今後の課題となるが、深澤家住宅がふたたび、贛川をになう役割を期待されていることは疑いない。

(金井 健)

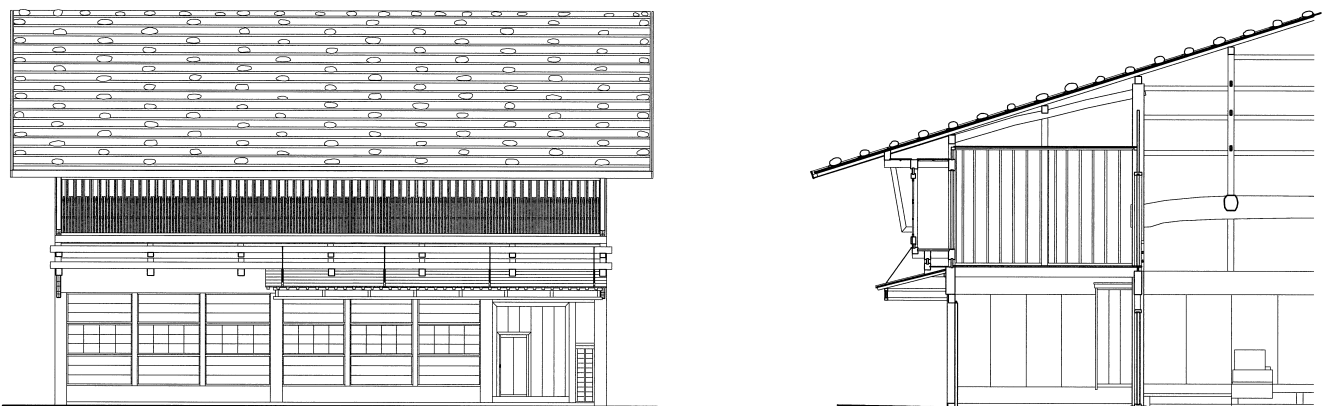


図67 主屋正面 復原立面図・断面図 1:150